平成26年度文学部フォーラム

「それでも天は転(まわ)る―熊本におけるもう１つの近代―」報告

大島　明秀

2014年11月22日、熊本県立大学中ホールにおいて、平成26年度文学部フォーラム「それでも天は転(まわ)る―熊本におけるもう１つの近代―」を開催しました。

本フォーラムは、西洋型の社会システムを導入していく幕末近代移行期に、西洋化ではない「もう１つの近代」を構想した人物を取り上げながら、「日本の近代化」をめぐる理解を問い直すことを狙いとして企画されました。当日のプログラムは以下の通り。

《次第》

12：30　開　　場
13：00　開会の辞　津曲　隆（熊本県立大学副学長）
13：20　基調講演　春名　徹 氏（歴史研究者・作家）
　　「佐田介石と不満なる近代―天動説と開化批判―」
14：30　パネルディスカッション「熊本におけるもう１つの近代」
　　コーディネーター　半藤英明
　　（熊本県立大学学術情報メディアセンター長）
　　パネリスト　　春名　徹 氏
　　平岡隆二（熊本県立大学文学部准教授）
　　「江戸の天文学と梵暦運動」
　　大島明秀（熊本県立大学文学部准教授）
　　「菊鹿の僧侶・原口針水の近代」
16：00　講　　談　旭堂南海 師
　　「『講談・佐田介石物語』―時代遅れと笑えるか？―」
16：30　閉会の辞　砂野幸稔（熊本県立大学文学部長）

〈近代化〉を再検討する上で、話題の一つの中心となったのは、幕末・近代に反欧化運動を巻き起こしたことで知られる熊本正泉寺の僧侶・佐田介石でした。

はじめに、『細川三代』（藤原書店）などのノンフィクション作家として高名でありながら、一方で漂流記など歴史学研究の方面でも数々の研究成果を挙げられている春名徹氏をお迎えし、「佐田介石と不満なる近代―天動説と開化批判―」と銘打った基調講演を行っていただきました。講演では、最新の研究成果を踏まえながら、従来の介石像を打ち破る新たな人物像と評価が提示されました。

引き続き行われた、パネルディスカッション「熊本におけるもう１つの近代」では、まず前述の春名氏の講演に応答して、日本思想史（科学史）を専門とされる平岡隆二准教授から、科学という研究視座から、佐田介石が拠りどころとしていた梵暦運動に着目し、この運動が反欧化主義の一つの原動力となったことを紹介されました。続いて歴史学（洋学）の大島からは、佐田介石と同じ真宗僧ながら対照的な生涯を送った菊鹿の僧侶・原口針水の事歴を発信し、両者の比較からその評価を行いました。発表後、近年本学文学部が主催してきた、L. L. ジェーンズや徳富蘇峰シンポジウムの仕掛人である半藤英明学術情報メディアセンター長の司会の下、活発なディスカッションが行われ、会場からの応答も相俟って議論が深められました。

最後に、大阪から旭堂南海師をお迎えして、本フォーラムにおいて一つの主題的人物となった佐田介石を題材として創作いただいた創作講談「『講談・佐田介石物語』―時代遅れと笑えるか？―」を会場にお届けしました。

図１　ポスター

図２　当日の様子

当日は、学外の一般参加者と学生・教員合わせて180名の参加者を得て、盛会のうちに終えることができました。

以下、春名徹氏の講演、ならびに平岡准教授、大島の発表要旨を掲載します。

春名徹《佐田介石と不満なる近代》

熊本の浄土真宗の僧侶・佐田介石（1818－1882）は存在そのものが、ひとつの矛盾である。黒船来航以来の政治的、文化的な価値の転換は、すべて彼の気に入らなかったが、それだけでは単なる伝統主義者にすぎないだろう。

彼の特色は西欧的な論理を取り入れて、相手の内側で、その価値体系と切り結ぼうとしたことである。だから彼は仏教的な宇宙の証明に西欧的な機械仕掛けを用い（視実等像儀の制作）、明治十年の博覧会のころからは、国産品の愛用を唱えて舶来品を排斥し、代用品を推奨した（「ランプ亡国論」、菜種油による「観光燈」の製作）。

これとともに彼は考えの実現のために、政策提言（建白）型の〈上から〉の方法から、直接、民衆に訴える説法という〈下からの〉変革へと方向を転換したことにも注目せねばならない。その運動が一定の支持者を得たことに、彼のなげかけた近代への大きな疑問とその意味を考えないわけにはいかないのである。

平岡隆二《江戸の天文学と梵暦運動》

釈円通（1754－1834）に端を発する、江戸後期から明治期にかけての梵暦運動は、かつては〈近代〉に対する〈伝統〉の対抗運動として評価されるのが一般的であったが、近年はテクスト論や史料論の観点からの再評価が進んでいる（岡田正彦『忘れられた仏教天文学』2010年、等）。本発表では、そうした研究動向を踏まえつつ、円通の主著『佛国暦象編』（文化７・1810年初版）テクストの思想史的な再評価を試みた。

具体的には、円通が行った、仏典中の基礎データの整理・標準化の作業や、観測事象や暦数による須弥山説の証明（あるいは説得）の技法を取り上げ、その議論の

枠組みが、単純な伝統主義的反動ではなく、むしろこの時期日本に浸透しつつあった近代科学的な方法や証明スタイルを色濃く反映したものであったことを論じる。それにより、円通を初めとする19世紀日本の梵暦テクスト（儀器も含む）を、仏教世界像の新しい記述スタイルを確立しようとする試み、として読む視点を提示・紹介した。

大島明秀《菊鹿の僧侶・原口針水の近代》

菊鹿の浄土真宗の僧侶・原口針水（1808－1893）は、幕末維新期に浄土真宗の排耶運動をリードしたことで知られ、明治24年には大学林の総理事務取扱となり、仏教者としての高みに上り詰めた。

加えて、西本願寺派第22世法主・大谷光瑞の学事長をつとめ、「日本型政教分離」をもたらしたことで後世評価される島地黙雷を弟子に持つなど、教育者としても手腕を発揮した針水の目指した近代は、社会の変革ではなく、「真宗（仏教）の近代化」であった。

針水の仕事は、あくまで政府が構築した枠組みの中で、どうやって真宗（仏教）が存続できるのかを模索したものと言える。この点において、維新期頃から真宗と袂を分かち、仏教者としての出世街道をはずれながらも、社会変革を構想して政治活動を行った佐田介石とは対照的であった。

また、本フォーラムと連動する形で、熊本県立大学学術情報メディアンセンター図書館で、企画展「熊本におけるもう１つの近代」を開催しました。会期は11月17日から29日、題名にかかわる14点の和本、洋書、巻物、掛軸を出品し、展示パンフレットを作成しました。

少しでもたくさんの方々の御高覧に供するため、以下、内容を転載したいと思います。なお、実際のパンフレットでは、熊本市立熊本博物館の許可を得て、当該館が所蔵する器物「視実等象儀」を表紙に掲載しましたが、ここでは省略します。

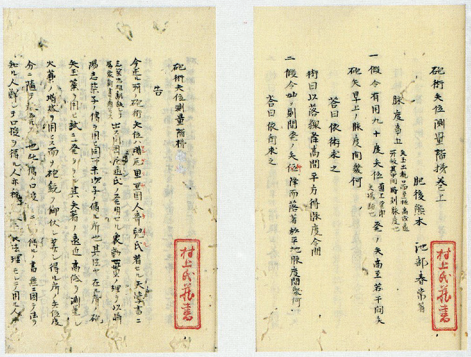
なお、展示キャプションは、歴史学研究室の教員（大島明秀）とゼミ生（成富なつみ、池田佳奈美、前田悠希、松田来美、吉田千夏、鷲﨑有紀、森上みやび）とで作りました。

その際、版本は版、写本は写、活字資料は活と略し、また、熊本県立大学図書館蔵本は（図）、日本語学研究室蔵本は（語）、歴史学研究室蔵本は（歴）と示しています。

（1）池部啓太「砲術矢位測量階梯」2巻1冊　写　1833序（図）

長崎の末次忠助から蘭学を学び、その後高島四郎兵衛・秋帆父子について新渡西洋流砲術を修めた池部啓太（1798-1868）は、熊本藩の砲術師役兼算術師役を務め、藩の兵制改革に尽力した。空気抵抗を考慮した弾道学を説いたことで知られる。

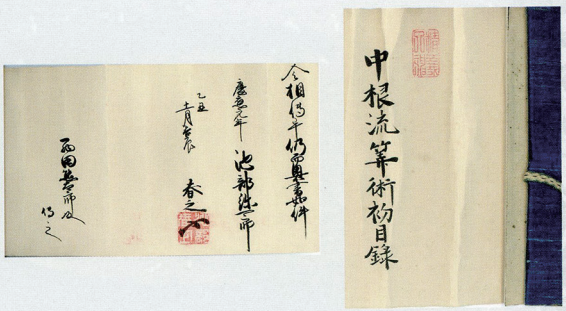
本書は、志筑忠雄から末次忠助を経て池部啓太へと口授された物理（弾道）学を、初学者向けに問答形式でまとめたものである。よって、空気抵抗を考えない理想状態での計算を用いた例題を掲載している。（成富）



（2）池部弥一郎「中根流算術伝授巻」1巻　写　1865成（歴）

慶応元年（1865）に書かれた中根流算術の目録。池部弥一郎から西田熊太郎へ算術が伝授された旨が記されている。弥一郎の父は新渡西洋流の砲術家として知られる熊本藩士池部啓太である。

本伝授巻は、中根流算術の目録である。中程に見える「九章之事」とは、『九章算術』（中国に現存する最古の数学書）を元にした算術の法を指す。西洋流砲術の家に生まれた弥一郎が、古典的な算術を伝授する立場であったことにも注目すべきである。（鷺﨑）



（3）城鞠洲「鞠洲医事文稿」3編　写　1864成（歴）

城鞠洲（1800-1870）は再春館の助教をつとめたことでその名が知られる儒医であるが、これまでその仕事が日の目を見ることはほとんど無かった。

本書は、鞠洲の医学・医者に対する理念や処方を記した草稿であるが、中には、文久２年（1862）の麻疹流行に際しての診療記録も見られるなど、豊富な内容を備えている。（大島）

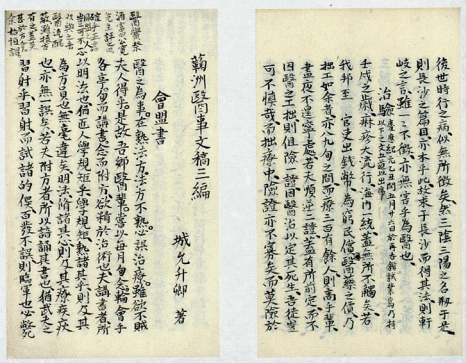
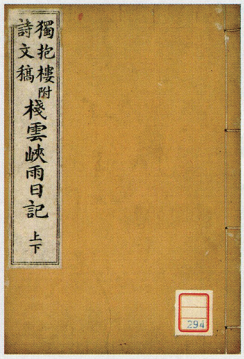


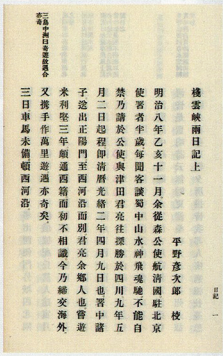
図３

（4）竹添進一郎『桟雲峡雨日記』2巻1冊　活　1912刊（図）

竹添進一郎（1841-1917）は、肥後天草に生まれた熊本藩士で、後に天津領事や韓国弁理公使などを歴任した人物である。

明治 8 年（1875）竹添は森有礼に随行して清に渡り、中国内地を旅行したが、その際に漢文で記した日記が『桟雲峡雨日記』である。この日記は、明治 12 年に初版が刊行された後も数度にわたり増刷や再版が行われた、いわば当時のベストセラーであった。なお、本書は大正元年（1912）の再版である。（前田）

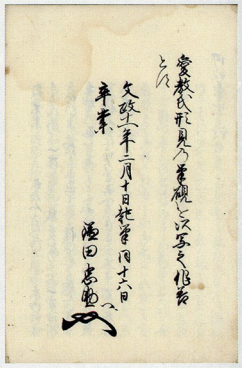




（5）「阿部茶事談」1巻1冊　写　1765以前成（歴）

本書は、熊本藩で起きた討入り事件を題材とした実録書である。藩主細川忠利は、かねてから疎んでいた家臣阿部弥一右衛門の殉死を許さなかったが、弥一右衛門は一人生き延びた恥辱に耐え切れず切腹する。結果、忠利の遺命に背いた科で阿部一族は家格を落とすこととなった。意を決した一族は屋敷に立て籠り、藩からの討手との死闘の末に全滅する。

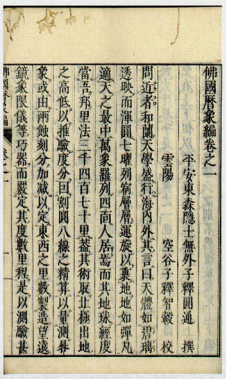
森鷗外「阿部一族」（1913）の種本となった本書は、多くが史実に基づいているが、脚色の見られる部分もある。（森上）



（6）釈円通『仏国暦象編』5巻5冊　版　1810序（歴）

西洋科学に傾倒していた世の風潮に憤慨した天台宗の僧侶・釈円通（1754-1834）は、著書執筆や講演活動を通じて、仏典に描かれた宇宙観である須弥山世界説を提示し、その〈正しさ〉を主唱した。本書はその嚆矢となった作品である。

円通が喚起したこのいわゆる梵暦運動は、宗派を越えて賛否両論の議論を喚起し、一大ムーブメントとなった。幕末明治期に反欧化運動を展開する熊本正泉寺の住職・佐田介石にも大きな影響を与えた。（大島）



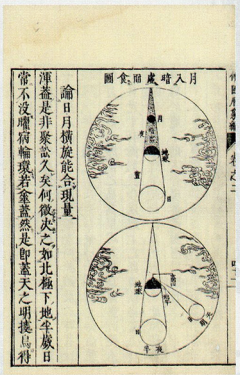
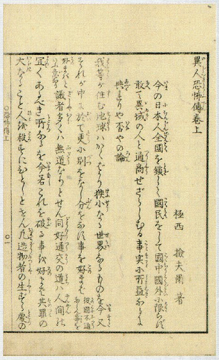


図4

（7）黒沢翁満編『異人恐怖伝』3巻3冊　版　1850刊（歴）

ロシアの南下が深刻化する状況下で、長崎の蘭学者・志筑忠雄はケンペル『日本誌』蘭語版の附録論文に着目し、これを「鎖国論」（1801）と名付けて訳出、「西洋から見た日本」についての情報を世に提供した。

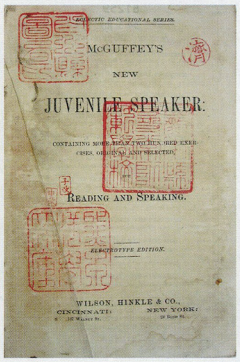
半世紀後、異国船来航に悩まされる状況下で、忍藩士・黒沢翁満は「鎖国論」に描かれた日本の賛美的記述を利用するために、写本で流布していた「鎖国論」に着目し、『異人恐怖伝』と改題して上梓した。その狙いは、「西洋風」を排し、「大和魂」を回復することにあった。（大島）

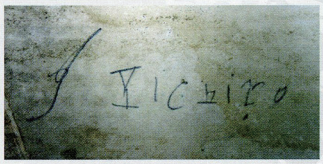


（8）『マクガフィーの新少年少女話し方』1冊　活　1860頃刊（図）

短期間での近代化を目指した幕末明治期の日本では、各地でお雇い外国人を招聘して洋学校を設立し、欧米の学問・教育を導入する動向が盛んとなった。

熊本でも明治４年（1871）９月に洋学校を開校し、同９年（1876）８月に閉校するまで英語直接法による初歩的な教育を行った。本書はそこで用いられた入門的な英語教科書。後に帝国主義的な議論を主導する徳富蘇峰（1863-1957）の若き日の署名が認められる。（大島）





（9）仁藤巨寛『等象斎介石上人略伝』1巻1冊　活　1883年刊（語）

浄土真宗本願寺派（晩年は天台宗）の僧侶・佐田介石（1818-1882）は、西洋文物の流入に対して強い危機感を覚え、舶来品排斥運動を主導し、また、仏教天文学を研究するなど精力的に反欧化運動を展開した。

本書によれば、介石は国事に尽力し、度重なる建言により、嫌疑を受けたり捕縛されたりといったことも多くあったという。門人である仁藤巨寛の記述を通して、介石の学僧としての勤勉さだけでなく、憂国の想いの強さが伺える。（松田）

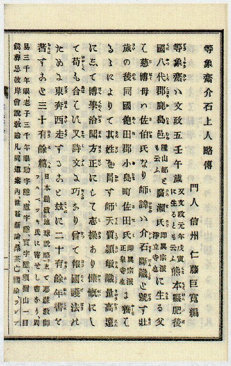
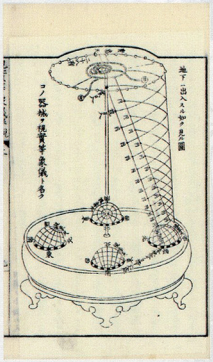


図５

（10）佐田介石『視実等象儀詳説』1巻1冊　版　1880刊（図）

視実等象儀は、地上からの見かけの宇宙と実際の宇宙の関係を示すために、須弥山を中心とする円盤状の世界をモデル化して作られた天象儀の一つで、現物は熊本市立博物館等に所蔵されている（表紙参照）。本書はその解説書で、北極を日月行度の中心として視実両象を論じている作品である。

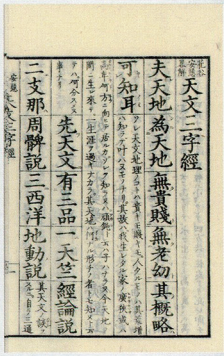
本書には『海国図志』（1843）を典拠とした地球図の引用が認められ、西洋科学を批判しながらも、その地理知識を利用することで自身の宇宙観の正しさを唱えようとした介石の戦略が読み取れる。（吉田）



（11）花谷安慧『天文三字経』1巻1冊　版　1874刊（歴）

釈円通の提示した須弥山世界説に基づき仏教天文学を担った者の一人に、花谷安慧（1819 - 1901）という小国町善正寺の僧がいる。安慧は著書や書簡を通して同じく熊本の仏教天文学者である佐田介石の論に対抗した。

本書は、仏教天文学の内容を三字一句で叙述する、暗記に適した形式をとった初学者向けのテキストである。書袋と見返しには須弥山儀と渾天儀を中心に、それを指して楽しそうに論争をしている人々が描かれている。（池田）



（12）原口針水『タノム考』1巻1冊　版　1892刊（歴）

「タスケタマヘ考」と合綴されている本書は、幕末明治初期に反キリスト教的動向を展開した浄土真宗の僧侶・原口針水（1808-1893）による古語注釈書である。

針水は山鹿郡光照寺に生まれ、福岡万行寺で真宗学を修めた。幕末には西本願寺の学林で、敵対宗教であるキリスト教の典籍についての講義を行っている。後に西本願寺第22世大谷光瑞の真宗学指南、龍谷大学の前身・大学林の総理事務取扱を務めた。（大島）

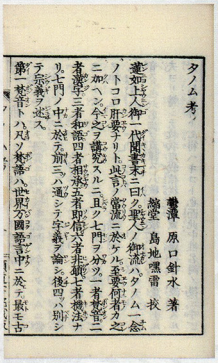


図6

（13）釈円通『須弥山儀図幅』
1幅　版　1813刊（図）

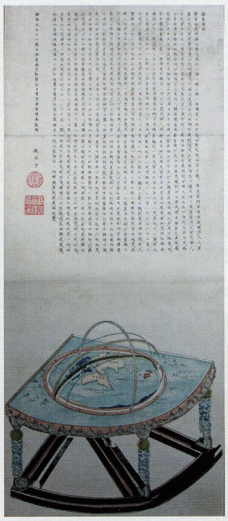
梵暦運動の主導者・釈円通は、須弥山世界観を立体模型化した「須弥山儀」を考案したが、実際の製作は叶わなかった模様で、代わりに図を描き、掛幅を作成した。円通はこれをもって各地で仏教天文説の講演を行い、少なからぬ宗派を越えた賛助者を獲得した。

本図は蓋天説に基づいており、平面的に描かれた地の上に須弥山を中心とする世界が広がり、これを覆う形で日・月・星群が動く仕組みになっている。（大島）

（14）釈円通『縮象儀図幅』
1幅　版　1814刊（図）

「須弥山儀」に続いて円通が考案した「縮象儀」は、須弥山の周りを囲む東西南北の4つの島のうち、人間が住むとされる南閻浮洲を表現したものとして構想されているが、実際には西洋地理に基づく大陸図（東半球）が宛てられ、その上に蓋天説に基づいて動く天体の仕掛けが備えられた立体模型であった。

仏教天文説の宣教活動と西洋に対する優位性を主張するために、西洋天文学を逆利用した円通の姿勢は興味深い。（大島）



※資料13、14は最終日のみの展示

【付記　パンフレットの訂正・補足】

資料（10）『視実等象儀詳説』

・１巻１冊→２巻１冊

・巻之上は北極だが、巻の下では須弥山を日月行度の中心として視実両象を論じている。

資料（13）『須弥山儀図幅』

・岡田正彦氏によって、円通が須弥山儀を製作していた可能性が指摘されている。ただし、その場合でも掛軸の製作年代より後のことである。

※以上は、梅林誠爾名誉教授の御教示による。